

清姫は、自分で水をふくむと、男の唇に水を流し込んだ……。唇が男の唇にあてられている……。

男の目やにのたまった眼から、光る物がこぼれ落ちるのを、安珍は見た。

子どもたちが、サルトリイバラの葉を摘んで来た……。

清姫は、自分の着物の袖をやぶって引き裂く……。

「何をするんだ!?!」

「サルトリイバラには殺菌作用がある!これを、しばって包帯のかわりにする……。」

言うなり、サルトリイバラの葉を患部に押しあて、やぶった袖布で巻いていく。

子ども達も、それを真似して、おのおの着物を破り、サルトリイバラの葉とともに巻いていく……。

「安珍!」

気が動転して……何も出来ないでいた安珍に、清姫が声をかけた。

「服を脱いで、この人に着させて!私たちの服じゃあ小さすぎる。」

男に、安珍の白い行者装束が着せられた……。安珍は、ふんどし一つの姿で、男を背負い、清重の館に運んだ。

男は、布団をかけられて、離れに寝かされた。

清姫は、ハツに命じてギシギシの根を取って来てもらおうと、

それをすりおろし、患部に塗った。

「ありがとう……。」

一息ついたところで清姫が言った。

「いや……。」

といったとき、安珍は言葉が出て来ない……。

自分は、何をするべきかもわからなかった……。

ただ、清姫に言われたままに、したがっただけだった。

安珍は、とても恥ずかしかった……。

子どもの清姫があんなにしっかりしていて……。

それに比べて、自分はなんて未熟なんだろう……。

